

XVI. 追悼文

名誉会員 田中茂穂先生を偲ぶ

本会会員中恐らく、最年長者であられた田中茂穂先生は、1974年12月24日午前3時3分、武蔵野日赤病院で96年4ヶ月の生涯を終えられた。数年前から脳軟化症で療養しておられたが、74年12月初め肺炎のため、昏睡状態に陥られ、一時御回復のきざしもあったということである。

先生は明治11年(1878年)8月16日、高知県上街に生まれ、34年、一高から東京帝国大学理科大学動物学科に入られた。在学三年目に、大阪で開かれた内国勸業博覧会に出品された魚の査定が縁で、魚学専攻が運命づけられたとうかがっており、他方、同郷の大先輩、植物学者牧野富太郎博士の事が、田中先生の御脳裡にいつもおありであったとも思われる。

明治37年(1904年)、大学院へ進学された。翌38年世界一流の魚学者で、スタンフォード大学総長として名声の高かったD・S・ジョルダン博士の第2回目来日の際、先生は飯島魁先生の御尽力も得て、文部省から、ジョルダン博士のための研究助成金の交付を受けて差上げたが、これは異例のことと聞いている。先生自身も東北地方から北海道へ採集に出られ、ジョルダン博士に協力された。アガシーの弟子であるこの大人物に出会われたことが、先生のそれから大きな影響を与えたことは疑うべくもない。

明治44年(1911年)、ジョルダン博士第三回目の来日の際には、先生はすでに理学部講師になっておられ、油壺の臨海実験所で、ジョルダン博士と起居を共にして研究された。

この年から、田中先生の業績中最も大きいものの一つである「日本産魚類図説」(和英両文)の出版が始められ、それは第48巻(昭和5年-1930年)まで続けられた。大正2年(1913年)に出た「日本産魚類目録」(東京帝国大学理科大学紀要33巻)(英文)は、ジョルダン、スナイダー両博士と田中先生の共著で、これは日本の魚に関しては、空前の労作である。その後、日本魚学上巻、数十種にのぼる魚の新種を記載した論文、魚の愛好者並びに魚学者向きに書かれた数多くの単行本を出された。

先生50才後の御仕事で特に重要なのは、先生がジョルダン博士に招かれてスタンフォード大学で楽しまれた研究(1926年)の後に書かれた、日本の魚の分布についての英文の論文(東京帝国大学理学部紀要、第四類第三第一号、1931年)である。これが学位論文であった由。この論文で、北日本と南日本は、魚に関する限りでは、どこが境界になっているかを、指摘されたのであった。

私が初めて先生に御目にかかったのは1932年で関東大震災の傷跡がいたいたしく残されたままの建物の下の方にある、先生の研究室においてであった。先生は54才になっておられた。その後のこと、亡くなられる年までの42年間については、いろいろ思い出すエピソードも多い。酒がもとでの御入院のこと、教授になられた頃のこと、また、95才までギリシャ語、ラテン語に関する大著の原稿を書き続けておられたことなど……。それらを詳しく述べるスペースがないが、ただ一言、つけ加えることを許していただけるなら、田中先生は学者として人事を尽されたと申すべきであると思われる。

クリスチャンである御長女呼子美子様とその夫君呼子丈太郎氏(歌人)の願いが叶って、1974年の奇しくも12月25日に、日本キリスト教団洗足教会で、先生の告別式が行われ、北久保勝也牧師から、田中先生が天国に召された事情が語られたのであった。

先生が苦心して集められた文献や標本を前にして、私達は何を為すべきか、深く考えたいと思う。
(阿部宗明 記)